法華寺旧境内の調査
―第356次・357次・358次・364次

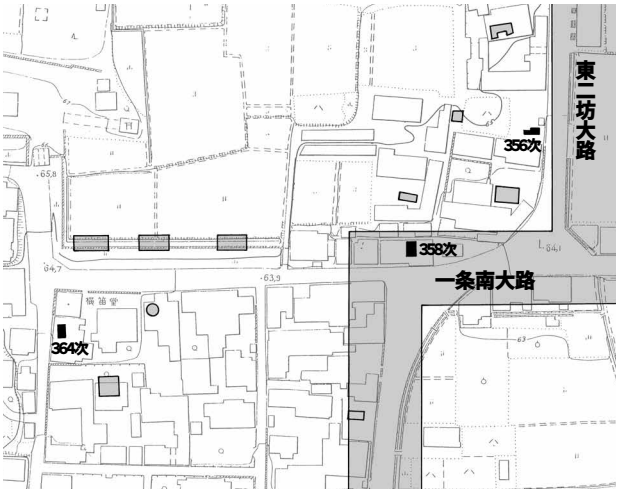

図192　第356次・358次・364次調査区位置図　1：2500

1　第356次調査

本調査は個人住宅の増改築にともなう緊急調査として実施した。調査地は法華寺町内、法華寺旧境内東張出部の東南隅に位置する（図192）。調査面積は7.5㎡、調査期間は平成15年４月15日から４月18日である。

現地表面は標高約64.3m、クラッシャー礫、表土、填圧した宅地造成盛土を除去すると旧地表面に達する。近代の遺物を含む暗茶色砂質土、茶褐砂質土の遺物包含層が堆積し、標高63.8m付近で遺構面にいたる。地山は黄褐色と白色が斑状に混じる砂土で、遺構によって掘り込まれており、もっとも高いところで標高63.6mである。

検出遺構

古代と近代の溝２条、土壙１基を検出した。

ＳＤ8595　南北方向の素掘りの溝で、東半には掘り直しかと思われる明確な段があり、これによって上下層に分けた。下層は最大幅0.8m、深さ約0.3m、上層は最大幅約1.2m、深さ約0.2mている。両層から土師器・須恵器・瓦が出土した。

ＳＫ8596　不定形の土壙で溝SD8595の上層を切り込み、後述する溝SD8597によって東部分を壊されている。埋土からは奈良時代の須恵器のほか、中世から近世初頭に位置づけられる土師器の羽釜が出土した。

ＳＤ8597　南北方向の溝で、西側の肩のみを検出した。検出部分の深さは約0.7mある。埋土は粘性のある青灰色砂質土で、軒瓦のほかに、近代の染付け片などが出土している。この溝は1977年度の第103－12次調査で検出した南北溝の延長部分の可能性がある。

出土遺物

瓦　奈良時代の軒平瓦6681Bが１点、中近世の巴文軒丸瓦１点、ヘラ書きのある平瓦、そのほか丸瓦、平瓦、磚などの破片が出土した。　（今井晃樹）

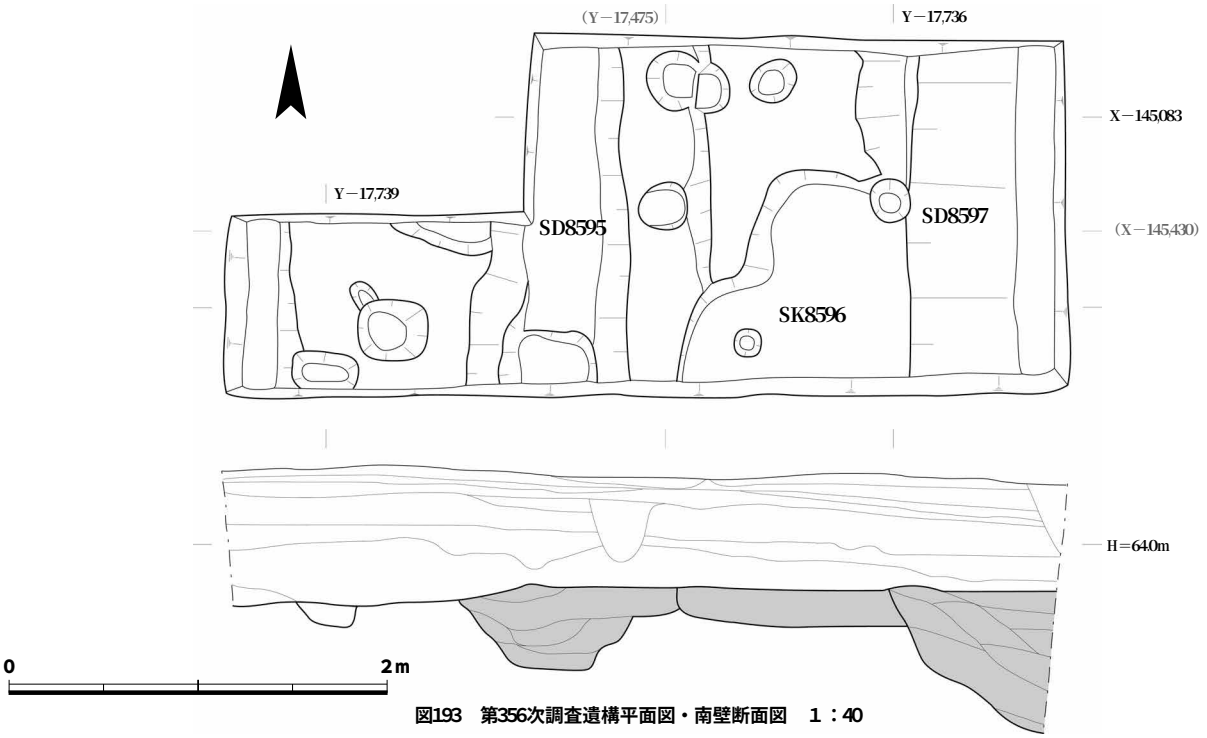

図193　第356次調査遺構平面図・南壁断面図　1：40

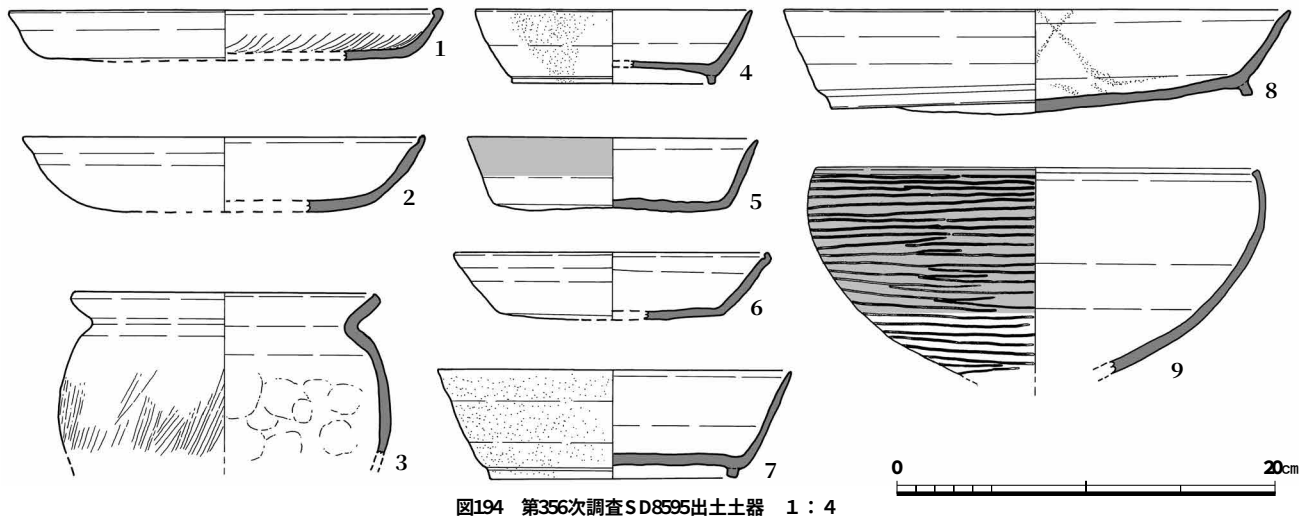

図194　第356次調査ＳＤ8595出土土器　１：４

土　器　調査区内からは、奈良時代、室町時代を中心に、各時期の土師器、須恵器、陶磁器が出土した。また遺物包含層からは二彩椀の小片が出土している。

比較的まとまった量の土器が出土したSD8595の資料について概述する（図194）。土器は、いずれも奈良時代前半の様相を呈し、溝の埋没時期を考えるうえで重要な資料である。出土量は土師器よりも須恵器が多い。

土師器には杯A（２）、杯B、皿A（１）、甕A（３）などの器種があり、小型の甕が目立つ。杯皿類は器表面の摩滅が著しいが、暗文を持つものが多い。須恵器は杯A（５）、杯B（４）、杯B（７）、杯C（６）、杯B蓋、皿B（８）、皿B蓋、鉢A（９）が出土し、圧倒的に杯皿類が多い。

（神野　恵）

おわりに

溝SD8595から出土した多数の土師器・須恵器は奈良時代前半に属することから、溝は奈良時代中頃にはすでに埋没していた可能性がある。本調査区は東二坊大路の西側にあたり、大路西側溝の検出が期待された。しかしSD8595の西肩と東二坊大路西側の坊の区画施設と想定される海竜王寺東門の芯との距離が約0.2mであるから、大路側溝の可能性は低いと考える。ただしこの付近は平城京内でも唯一変則的な区画を呈するところであり、正確な判断は今後の調査の進展を待ちたい。

2　第358次調査

個人住宅の新築工事にともなう調査である。法華寺町内、第356次調査区の南西に位置する（図192）。調査面積は約８㎡、調査期間は平成15年５月６日～５月７日。

表土、宅地造成土、暗灰色粘質土、礫層の順に堆積、標高62.0mのところで青灰色砂の地山に達する。この地山を掘り込む遺構を検出したが、遺構の全体像は確認できなかった。遺物包含層からは古代の軒丸瓦、中世の軒平瓦、丸瓦、平瓦などが出土している。　（今井）

3　第364次調査

調査地は旧法華寺境内に位置し、奈良時代の中枢伽藍の回廊すぐ東側にあたると想定される。

近代の瓦礫層下、暗灰褐色系の中世以降の遺物包含層直下が中世の遺構面となる。この面で、小型の礎石２個と、礎石間に地覆の用を為したと推定される丸瓦を伏せ並べた瓦列を検出した（SX8765）。礎石の間隔は約1.4m、礎石を結ぶ方位は北でやや西に振る。建物の一部と推定されるが、２個の礎石の西側80～90㎝離れて相対する小穴を検出しており、控柱をもつ塀の可能性もある。この礎石の東南側がやや窪み、ここから13～14世紀の羽釜および土師器皿（１・２）が出土した。これらは、遺構の廃絶に伴って投棄されたものと考えられる。これら遺構を破壊しない範囲で下層の状況を確認したが、奈良時代の遺構は検出できなかった。　（島田敏男）

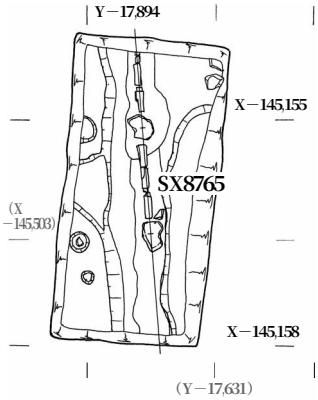

図195　第364次調査遺構図　１：100

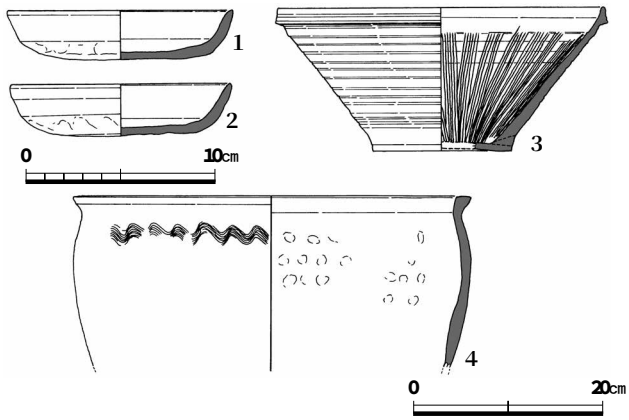

図196　第364次調査出土土器　１：４/１：８

4　第357次調査

法華寺町の個人住宅新築に伴う調査で、左京二条二坊十五坪にあたる（図197）。調査期間は平成15年４月21日～５月７日、面積は108㎡。法華寺旧境内の南寄りで、阿弥陀浄土院の東隣の坪である。南の十一坪、十四坪の調査でも大型の掘立柱建物群や施釉瓦が多数出土し、有力者の宅地であったと想定されている。

検出遺構

現代の盛土が厚く、東半部分は現代の廃材投棄土坑で壊されているが、各時期の遺構面は残存していた。現地表面下1.2mで、室町時代以降の旧地表面に達し、南北溝数条と井戸SE8541、SE8535を検出した。

さらに標高約61.00m付近で、橙青灰色粘質土の地山を検出した。一連の土坑SK8536、SK8537、SK8538は深く、焼土や焼けた瓦を大量に含み、土師器皿などから９世紀中頃に埋まったとみられる。これらの土坑から富壽神寶（818年初鋳）、三彩壺、施釉瓦なども出土している。いっぽう、西側のSK8540はやや浅く、焼土を含まないが、埋土最上層から施釉瓦が集中して出土した。

SA8539は掘立柱の柱穴で、抜き取られている。掘形は南北0.8m×東西1.2mの隅丸長方形で、深さは1.5mに達する。調査区内に、対応する柱穴は検出されず、柱穴の規模などから、南北につづく区画施設の可能性がある。また、SK8540の下で掘立柱柱穴SB8542を検出した。

表27　第357次調査出土瓦磚類集計表

軒丸瓦			軒平瓦		
型式	種	点数	型式	種	点数
6138	F	1	6664	C	1
6225	A	1		F	2
型式不明（奈良）		7	6667（施釉）	D	3
施釉		1	6721	C	1
				J	1
軒丸瓦計		10	型式不明（奈良）		2
			軒平瓦計		10

	丸瓦	平瓦	磚他	凝灰岩
重量	67.3kg	165.9kg	0.6kg	28.0kg
点数	602	1505	1	7

道具瓦：ヘラ書平瓦　１点

図198　施釉軒平瓦6667D　１：４

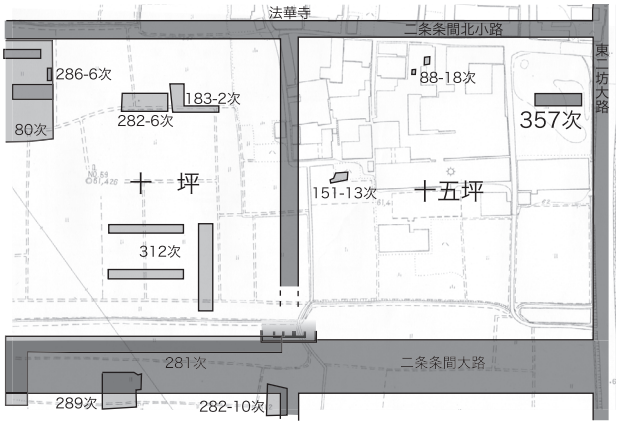

図197　第357次調査区位置図　１：3000

2　出土遺物

土器・土製品

土坑群を中心に奈良時代から平安時代の土師器、須恵器が出土したが、残存状況は良好でない。特筆すべきものとして、SK8536、SK8537、SK8538、SK8540から奈良三彩・二彩５点、緑釉１点、墨書土器２点、包含層から緑釉５点、墨書土器１点などが出土した。とくに施釉陶器が、調査面積および他の土器に対して非常に多く、注目すべき内容である。　（神野　恵）

瓦磚類

軒丸瓦10点、瓦軒平10点、丸瓦、平瓦、磚１点（表27）、施釉瓦が64点（軒瓦を含む）出土した。施釉瓦で釉を確認できたものは35点、釉が残存しないものが29点ある。胎土は精良で、焼成はやや軟質、色調は灰白色あるいは黄白色を呈す。釉色は緑色、褐色、白色（透明釉）がある。内訳は丸瓦（48点）と平瓦（11点）が大半を占め、型式不明の軒丸瓦が２点、軒平瓦6667Dが３点ある（図198）。従来の調査で出土した施釉軒瓦には、6667Dのほかに軒丸瓦6075A、6146A、6151A、6314E、6401A、軒平瓦6732X、6759B、6760Aがある。6314E、6667Dが平城宮軒瓦編年のⅡ－２期に属するほかはすべてⅣ－２期であるから、施釉瓦では最古型式である。6667Dは東大寺二月堂仏餉屋下層遺構に同笵の施釉例がある。　（今井晃樹）

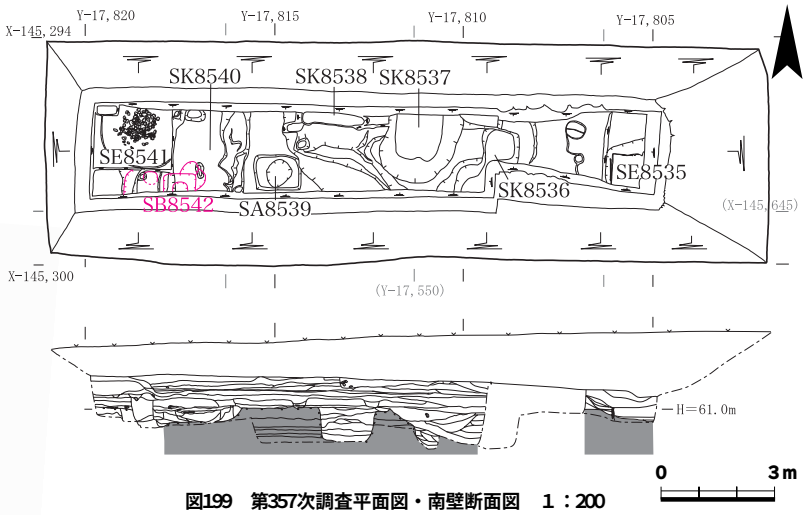

図199　第357次調査平面図・南壁断面図　１：200